

1979年出土の木簡



服部遺跡木簡出土地点図

(4) 「鳥」(曲物底)

径162×2 061

(5) (絵馬)

164×(44)×4 061

滋賀・畠田廃寺跡

9

以上五点のうち、(1)のみが、南側の条里溝(SD7)、(2)～(5)が北側の溝(SD5)から出土しており、(4)にみえる「鳥」は、前述の墨書土器にも、大量にみえており、「鳥益」という墨書を含めるなら30点以上にのぼる。本遺跡の性格を考える上で、注目されるところであろう。

関係文献

滋賀県教育委員会『服部遺跡発掘調査概報』

一九七九年

(大橋信弥)

- | | |
|-----------------|--|
| 1 所在地 | 滋賀県愛知郡愛知川町畠田字西鳥居 |
| 2 調査期間 | 一九七八年(昭53)七月～一九七九年(昭54)三月 |
| 3 発掘機関 | 滋賀県教育委員会 |
| 4 調査担当者 | 近藤 滋 |
| 5 遺跡の種類 | 寺院跡 |
| 6 遺跡の時代 | 白鳳時代～平安時代 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 畠田廃寺跡は大字畠田集落の南に所在し、古くより礎石や瓦の出土が伝えられていたが、具体的な位置、範囲等は不明確であった。発掘調査は県営ほ場整備に伴い実施したもので、排水路及び削平計画区域を対象に約一三〇〇〇m ² 発掘した。 |

遺跡の概要は雨落ち溝を巡らせ、東西三〇m、南北一八mの基壇幅を持つ建物跡を中心に、二×一間の細殿の他、一五棟の掘立柱建物・柵・溝・土壤・金工房・井戸等が検出された。また、寺域東外地区からは当寺の建設にかかわる堅穴や高床の住居跡も検出されている。

検出した遺物は須恵器・土師器・綠灰釉陶器・輸入磁器・瓦・木製品・石製品と埴堀・輪の羽口・銅滓・銅製品等の金工関係の遺物

と墨書き土器・木筒がある。特に埴堀には鍍金作業を示す金(Au)が微量ではあるが残留していた。また墨書き土器には「僧寺」「大」「寺」「棲」「貴」「三河」等が判読できる。

以上の結果、この遺跡は二町四方の寺域を持つ寺で、白鳳時代末期から平安後期まで存続し、綠灰釉土器の豊富さから、特に平安時代前期から中期にかけて繁栄したと思われる。また、平安期の土地買券で有名な愛知郡大國郷内に立地し、郡内でも大型の後期古墳群を控え、以後に述べる木筒の文字などから、愛知郡大領愛智秦公と深い関りを持つ寺跡と思われた。

8 木筒の釈文と内容

木筒は細殿の北の雑倉区域に検出された井戸内より出土したもので一点だけである。

釈文は鬼頭清明氏にお願いしたもので次のとおりである。

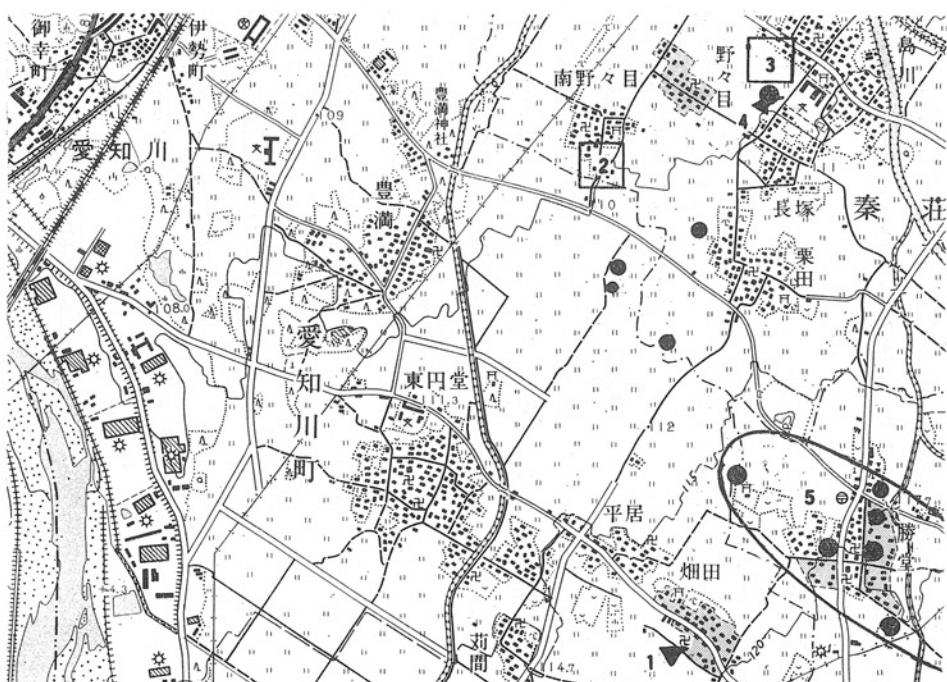
「秦秦秦_{〔秦カ〕}秦_{〔秦カ〕}『大火□』×

『火火火火 火』

(239)×44×4 019

性格は習書で二行に書かれ、第一行の大火□と第二行の火は、おのの別筆で合計三筆からなっている。また木筒そのものは下端が欠損しており、断面も楔状で左端側にしだいに薄くなり、左端は欠損している。

(近藤 滋)



畠田廃寺跡附近地形図(1.畠田廃寺跡 2.伝大国寺跡 3.大間寺跡 4.長塚古墳 5.勝堂古墳群)